

(講評) 劇団カミヒトエ『ヤヴノナカ』

「リーディング+ (プラス)」と銘打たれた公演ということで、「朗読を聞かす」ということを念頭に置かれて作られた作品であろう。昨年の上演をブラッシュアップしようと、いただいた感想(講評?)を参考に、朗読にプラスして「演劇の部分」を加えた上演と理解した。劇団の内部事情にまつわるお話にして、劇団員が台本を読み合わせるという構造と、読み合わせをする行為が「朗読」となっている、なおかつ朗読される内容と劇団の現状とが重なってくるという、重層的な構造と手法は興味深かった。

本の読み手は芝居の中の登場人物であり、そこには芝居の登場人物としてのキャラクターが設定されており、朗読部分はドラマの一部となっている、いわゆる劇中劇であり、「劇中劇」の部分を朗読にしたという劇構造であるが、問題はそうすることで作品は面白くなったのか?という点ではないか。読み合わせられる台本は、芥川龍之介の「藪の中」をモチーフにしたSF作品であり、原作同様にそれぞれの「証言」の内容が微妙に食い違う複雑な内容となっている。芥川の原作と大きく違うのは、証言がモノローグで語られず、戯曲化してあることで、あたかもテレビの再現ドラマのようになっていてそれを「読む」点である。戯曲化(ドラマ化)したことで観客は語られるセリフを頼りに、頭の中で再現ドラマを的確にイメージする必要がある、それを覚えておいて、次の証言の再現ドラマと比べる必要がある、さらにそれが劇団の内部事情を反映したものであることと、その事情を推測するレベルまでの正確な相関図を頭の中に作る必要がある。これが仮に実演された場合と比較するならば(黒澤明の映画「羅生門」を見る場合のようなこと)、リーディングの場合の方が観客にとってはより高いレベルの集中と記憶力が必要で、理解のハードルはむしろ高くなったと思われる。そもそも「台本の読み合わせ」という設定(コンセプト)が足かせになっているので、それは最初からできなかったのではないかと推測するが、そう考えるとなぜそうまでして「リーディング」にこだわるのか、リーディングに対してどのような魅力を感じているのか?が問われると思うが、残念ながら作品からはそれは伝わってこなかった。各キャラクターの「主観が食い違う」という設定は面白いが、その仕掛けをはっきりと観客にイメージしてもらい、楽しんでもらうには、テキストにおいても演出においてもさらなる工夫が必要だったのではないかと思う。

杉山準